

# FD Newsletter No.1

学長巻頭言	2
過去3年間の授業評価結果	3
研修報告	5

北海道医療大学 FD 委員会  
2001.3.31

新しくFD委員会ニュースレターが誕生したことをまず慶びたい。いまどきは横文字、それも頭文字による略記が流行るので、戸惑うことが多い。FDもいきなり聞くと、とくに一般の市民の方々には何の事かわからない人が多かろう。大学に奉職している者にとってはFDは一つの流行語でもあるから、知らないでは済まされないが、かく言う私もこの言葉に接したのはこの10年ほどまえのことであろうか。

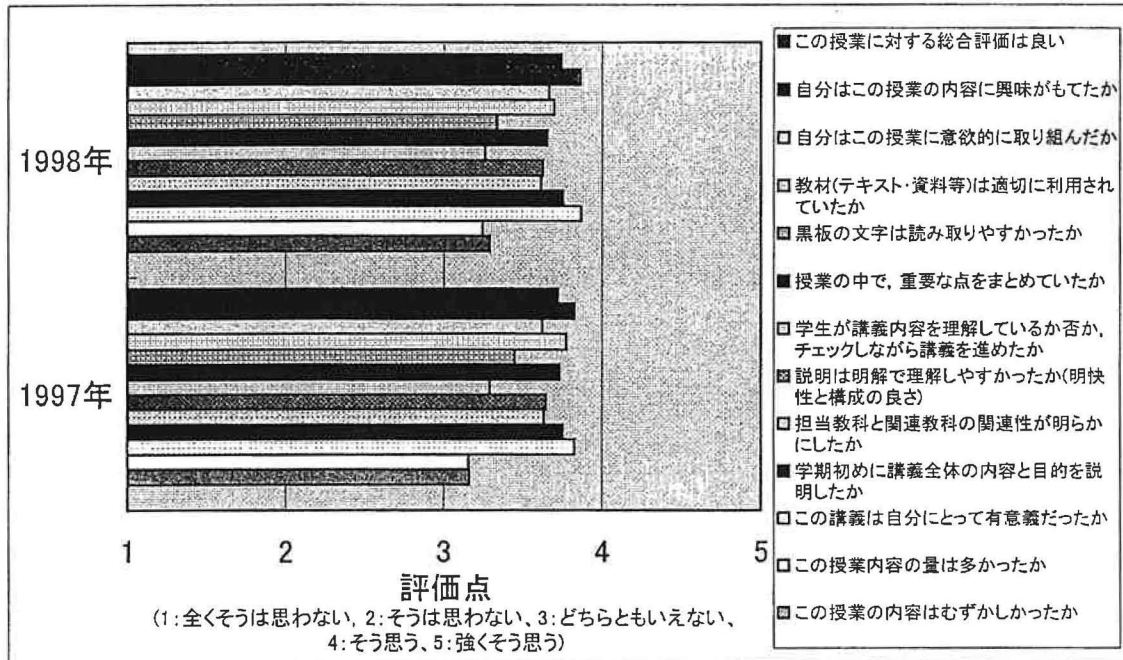
北海道医療大学では、平成2年にスタートした「21委員会」の中で、いち早く「FD推進委員会」を設け、前向きに検討を重ねているから、その先見性に驚かされる。そのおり詳細にFDの定義と分類を論じているので、本学の教職員にとっては、FDは耳慣れた日用語のはずである。21委員会のまとめ（1993年、平成5年）を受けて、本学では「学生による授業評価」や「教員の相互研修」などの提案がなされ、その実施に踏み切って、それなりの成果を収めてきた。

21委員会の230にも及ぶ提言のうち、まだ実施されていない課題への取り組みを検討するために、平成10年に「2008行動計画委員会」が発足し、翌11年12月にその内容がまとめられた。その中に再びFD委員会の活性化が取り上げられたのであるが、これからの10年間にわたる大学改革行動計画のなかで、いわばFD委員会活動の重要性が再認識されたといえる。それは大学の活性化に避けて通れない「教員評価制度」と「教員の任期制度」の導入に関連して「FD委員会機能の活性化」が浮上したためである。いわば教員の意識改革と活性化のための3点セットの一角を担うという認識である。私の理解では、この3点セットのうちの前2者は厳しいトーンをもっているのに対し、最後のFD委員会活動の方は相互扶助的なトーンが強い。お互いにFD委員会活動を通して、切磋琢磨し、他人に学んで自己を高めるよすがにしようというのである。そのためにこのニュースレターが大いに役立つことを期待している。

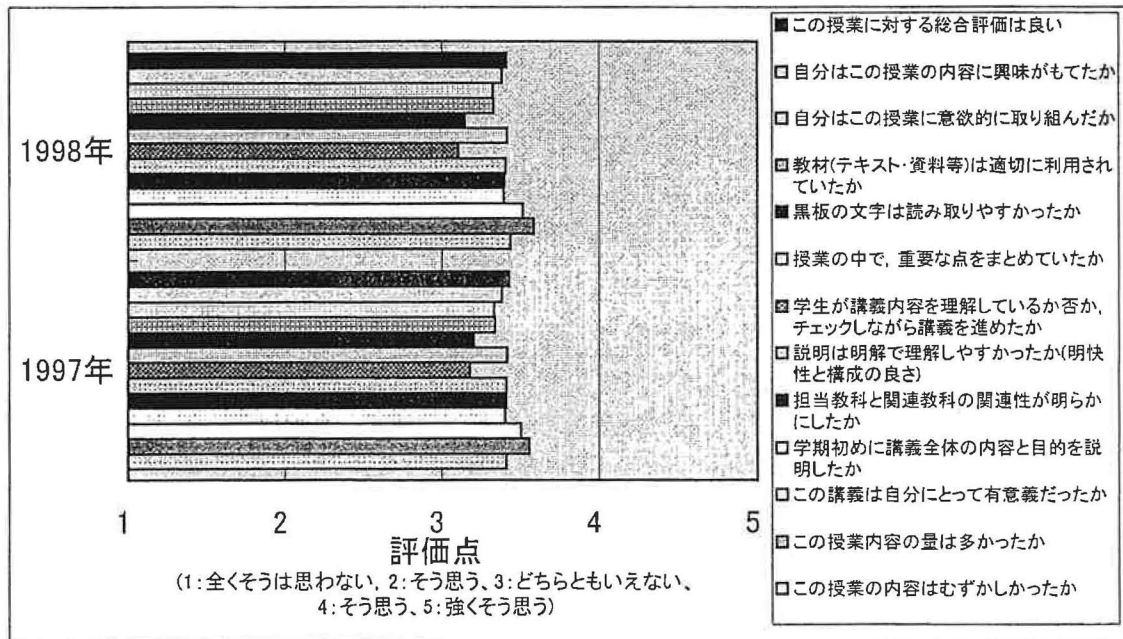
過去3年間の授業評価結果

下図に過去3年間の授業評価の集計結果を示した。授業評価結果の公表については慎重に行われなければならないが、全体の集計結果の公表は他との比較をして見なければ自分の位置がわからないので必要なことだし、個人情報情報が漏れることではないので、情報提供として掲載させていただく。

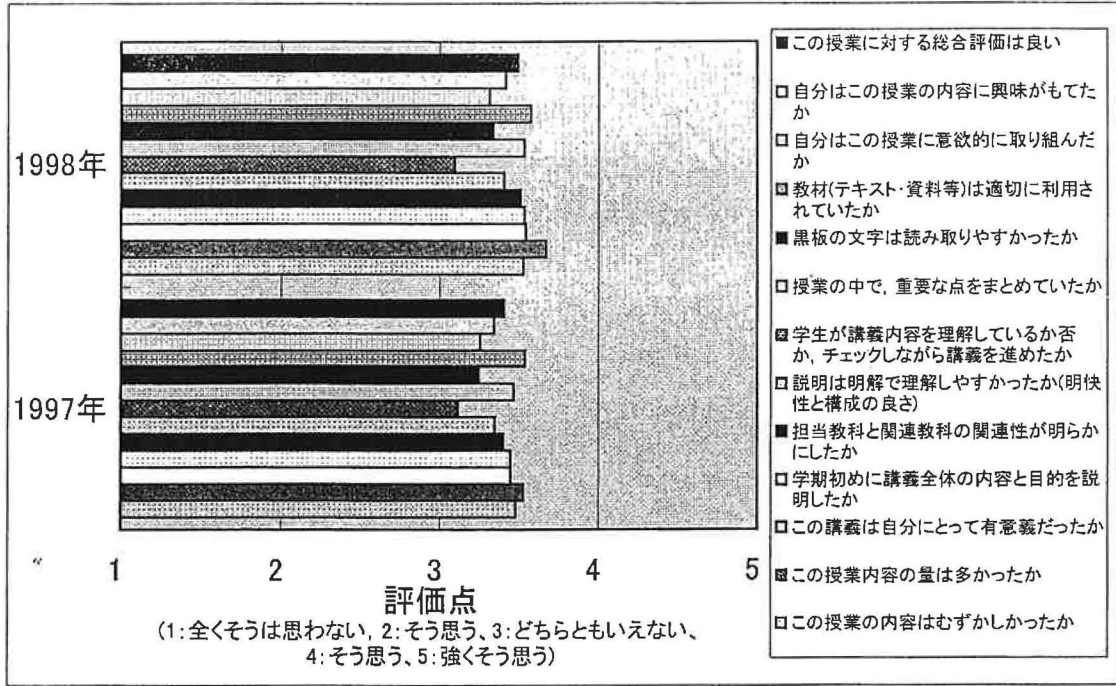
看護福祉学部授業評価(1997, 1998年)



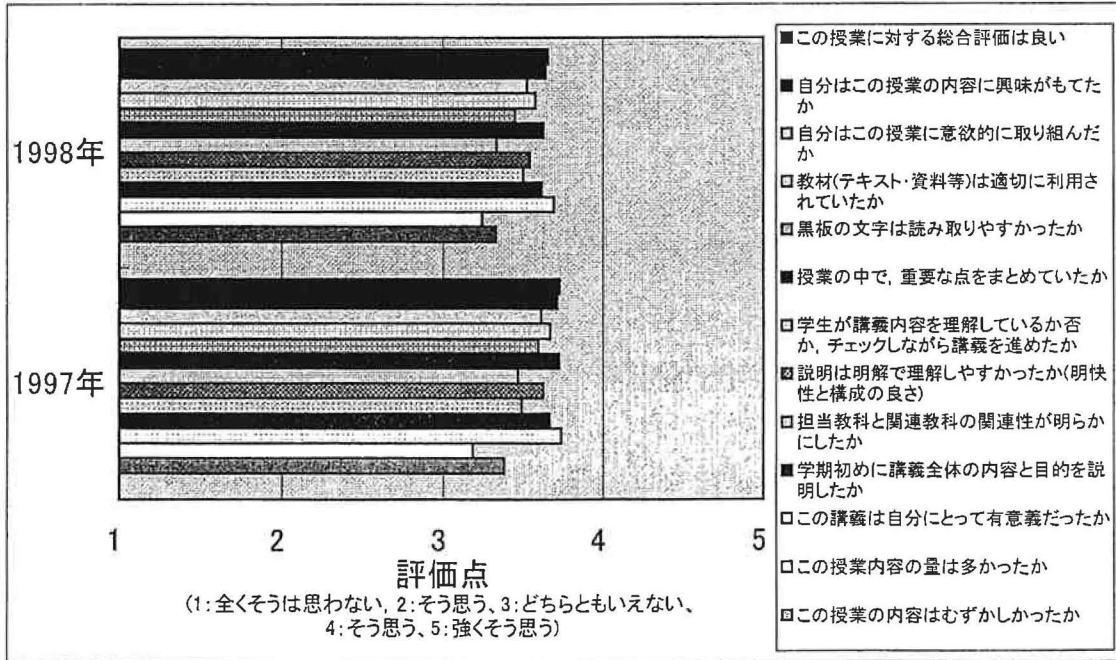
歯学部授業評価(1997, 1998年)



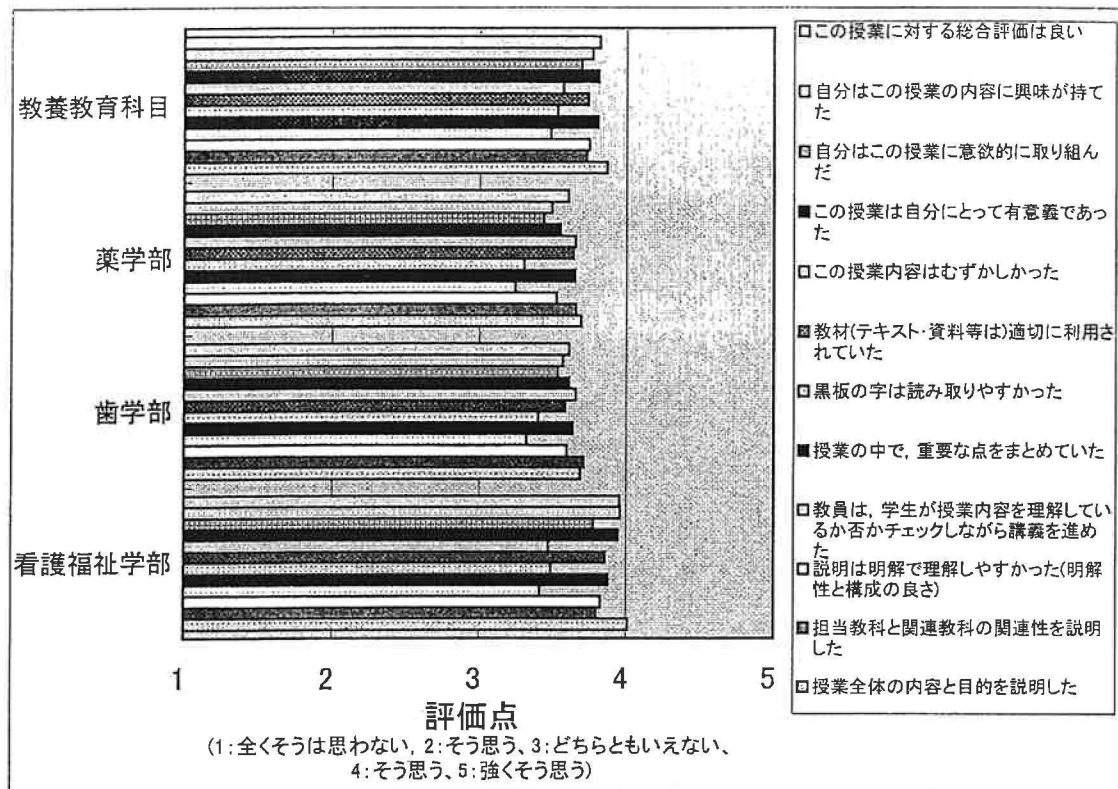
薬学部授業評価(1997, 1998年)



教養教育科目授業評価(1997, 1998年)



1999年度薬学部、歯学部、看護福祉学部、教養教育科目授業評価



研修報告 1

「高等教育におけるメディア活用法」研修会に参加して

歯学部口腔解剖学講座

矢嶋 俊彦

メディア教育開発センター（平成12年1月3日）で開催されました「高等教育におけるメディア活用法」講座に参加して参りました。内容は高等教育の場でメディアをどのように活用したらよいのかをテーマにして、①教育に活用できるメディア、②日本・アメリカ・カナダでのマルチメディア活用の事例紹介、③日本・海外でのバーチャル・ユニバーシティの動向・事例紹介、④インターネットでマルチメディア活用先進事例のサイトにアクセスし、調査・報告することでした。

教育にはメディアとして、動く映像（テレビ、ビデオ等）、音声（ラジオ等）、静止画像（スライド、OHP）が利用されてきましたが、現在はこれらを一つのものにまとめたマルチメディア（CD-ROM、DVD-ROM、インターネット、プレゼンテーション・ツール）が活用されています。また、これらのマルチメディアの活用により従来型教育にはない学習者中心の学習と自由な学習（教師と学習者の関係が時間的・空間的に自由）が可能となり、さらに学習の動機付け、体系的な教育、学習内容の理

解の深化, 自主的学習・トレーニング, 教材・資料の保存, 質問・情報交換, 研究支援等をさらに進めることができます。視点を変えると, 遠隔・生涯学習の拡充をすることにもなります。

マルチメディア活用教育では, アメリカ・カナダが進んでいます。カナダの British Columbia 大学 (<http://det.cstudies.ubc.ca/>), アメリカの Stanford 大学 (<http://stanford-online.stanford.edu/>, <http://sll-6.stanford.edu/>), 日本の東京工業大学 (<http://www.cradle.titech.ac.jp/>),

## 研修報告 2

### メディア開発センター研修会に参加して

看護福祉学部基礎臨床心理学講座  
高橋憲男

幕張のメディア開発センターで2000年9月4日、11日に行われた研修シリーズ「大学授業の自己改善法2000：自分の授業をどう捉えるか—授業評価に関わる書手法—」に参加した。この研修会に参加して、①メディア開発センターや他大学のFDに対する取り組み方、②教員のFDに対する問題意識を知ることができ非常に有益であったので、簡単に研修内容をご紹介します。

幕張のセンター参加者は僅かに2名であった。しかし、北見工大、小樽商大、岩手大学、山形大学、岐阜大学、三重大学、岡山大学、佐賀大学が衛星回線で結ばれて参加していた。

第1回目のテーマは「自らの授業を振り返るための授業情報の蓄積と活用」であった。

メディア開発センターの教員（大塚雄作・三尾忠男）による授業評価が紹介された。大

塚 慶応大学湘南藤沢キャンパス (<http://www.sfc.keio.ac.jp/mediacenter/index.html>)

、東京大学附属病院 (<http://www.umin.ac.jp/>) につきましては、アクセスして、ご自分でお確かめください。

IT革命は技術のみならず、教育・研究等の学問体系そのものの変化を惹起しています。われわれはマルチメディアに関する必要な技術と知識、さらに明確な目標を持ち、それを適切に利用・活用することが求められています。

塚教授による「学生による授業評価の実践と意義」では授業評価の意味を、①大綱化による教科目構成の自由化と同時にそれにより発生する教育責任 accountability、②他者からの批判による授業改善、③そもそも学習とは何かを問い直すという3点で纏めておられた。

いずれも重たい内容であったが、教育者として避けることが出来ないテーマであり、大学教員が教育責任を明確に認識しなければならない時代であることは共感できた。

具体的に大塚教授が学生に行なっている授業評価項目は、本学のこれからの授業評価を考えていく際参考になるので掲載させていただく。また、授業評価はシラバスとも密接に関連しているので、アメリカ心理学会が作成したシラバス作成時に留意することも資料として掲載させていただく。

講義の進度が早かった  
 講義の内容が難しかった  
 講義の分量が多かった  
 講義の目的がはっきり明示されていた  
 もっと教科書に沿って講義をしてほしい  
 講義の構成は適切であった  
 講義の説明はノートをとりやすいものだった  
 それぞれの学生の質問や相談に応じてくれた  
 成績評価の基準が明らかにされていた  
 講義には総じて集中できた  
 講義の構成に工夫がされていた  
 評価方法は講義の内容にふさわしいものであった  
 講師は学生の理解度に十分に気を配っていた  
 講義の時間配分は適切であった  
 講義は全体的に見て自分にとって価値があった  
 講師は講義のために十分な準備をしていた  
 講義の予習をするように努めた  
 講師は当初の講義目的を達成できたと思う  
 講義を通してやったという達成感がある  
 講義には積極的に出席した  
 学生に課す宿題・課題が不十分であった  
 講師の話し方は適切であった  
 どこが重要なポイントであるかがよくわかった  
 講師の話は興味深かった  
 内容に関する興味を高めるための配慮があった  
 毎回の授業に関するアンケート調査は有効であった  
 と思う  
 講師の話はわかりやすかった  
 講義の内容が興味深かった  
 さらに深く勉強を続けていきたい  
 新たな発見があった  
 講義から十分な知的刺激を受けた  
 講義には総合的に満足である  
 講義に具体例が適切に盛り込まれていた  
 納得いく成績を取得することが出来た  
 講義中の私語が気になった  
 講義は改善の余地が多かった  
 講師の話はまわりくどかった  
 学生自身に考えさせる工夫がなされていた

## A P A のシラバス作成時の留意点

- ① シラバスは授業計画の立て方を明確にする。
- ② 授業を行なう人間をシラバスを通して聴講者である学生に紹介する。
- ③ 学生がなぜその授業を受けなければならないかを明確にする。
- ④ 授業に必要な事前の準備、授業に合格する水準を明確にする。
- ⑤ どのように勉強したならば授業の成果が上がるかを明確にする。
- ⑥ 今受ける授業と今後の授業との関連性を明確にする。
- ⑦ シラバスには授業する人間の哲学、授業へのかかわり方、新しい授業の工夫などが触れられていること。

2番目の三尾教授による「授業情報の蓄積と活用」では①自らの授業を記録する、②授業活動を記録する、③ティーチング・ポートフォリオへ向けてという内容が取り上げられた。具体的な授業改善策の話であり、授業を行なう者と受けるものとのギャップの認識のための記録の作成、授業をスチル写真やビデオを用いて記録することの有効性が話された。三尾教授は授業設計に関わる項目として以下のことをあげていた。()内は高橋のメモである。

- a. シラバス
- b. 講義のカリキュラム内での位置づけ  
(自分の講義が学部なり学科なりでどのように位置づけられるか、また他の科目との関連性の確認)
- c. 授業：毎回、以下の項目について入力
  - c-1 授業準備：教材の2次情報と作業時間
  - c-2 提示教材：Power Point (授業の資料は極力コンピューターで提示)。CD-ROM やビデオの場合は代表

画面のスナップ。

- c-3 配布資料：極力自作に努め電子化  
(学生がパソコンを持っていればダウンロードが可能)。
- c-4 提出課題：レポート課題の文書
- c-5 授業評価調査結果
- c-6 授業者の感想：授業前後と調査結果
- d. 写真：授業風景をアピールするもの
- e. 成績評価：レポートの傾向について印象、感想も記録
- f. 施設設備環境：写真などに記録(これは、教室の写真をとって機器の配置などを記録し、授業の進め方の参考にする)
- g.; 修正シラバスの案
- h. 自己評価：本科目についての自己評価
- i. その他：学生の提出物

最後に、ティーチング・ポートフォリオの作成が提案された。ティーチング・ポートフォリオとは「大学教員が、自分の授業や指導において投じた教育努力の少なくとも一部を、目に見える形で自分および第三者についてあるために効率的・効果的に記録に残そうとするもの、技術や概念もしくはその活動をさす。(杉本、1997)」として説明されるものである。

2日目の研修は三重大大学の織田教授による「学生からのフィードバック情報による授業改善」であった。織田教授の授業評価の効果の捕らえ方は①大学の閉鎖性の打破効果(他の教員が何を教えているかも分からない閉鎖性)、②学問の自由と相互批判の実現、③授業マンネリ化防止効果、④授業改善効果であった。これを改善するため、大福帳(図を参考)を考案され、相当の効果をあげていることが紹介された。大福帳により、①欠席防止効果、②出席促進効果、

③積極的受講効果、④信頼関係形成効果、⑤授業内容理解、⑥学習定着促進効果、⑦自己努力、自己変容過程確認効果、⑧授業内容充実効果がある織田教授は説かれていた。この方式は以前紹介されていたらしく、研修会に参加されていたいくつかの教員が取り入れているとの事であった。参考に大福帳を掲載させていただく。

質問の時間があったので、授業評価に不参加の教員の理由をお聞きしたところ、授業評価の用いられ方の問題があるとの意見を伺った。要するに人事考課などに使われることへの抵抗である。ここは難しい問題であるが、現在各大学で進められつつある教員評価の問題の1つは「報われてない」という点をどうくみ上げるかであると著者は考えるので、FDを本学でより深めていく際、十分検討しなくてはならない点であると思われる。

講演者の提案や試みはなかなか興味があるところであったが、それぞれの大学の事情を考える必要性を痛感した。例えば、本学は国家資格の取得が教育と密接に結びついていること、授業を記録するにも機材を用意しなければならないこと、教員は教育ばかりに時間を割けないこと、教員評価などとの関連性を十分に考慮すること、などなど。

